

シンポジウム

『井野長割遺跡を考える』

～環状盛土をめぐって～



－ 2004. 9. 26 －

主 催

佐 倉 市 教 育 委 員 会
(財) 印旛郡市文化財センター

本日の日程

9 : 3 0	受付開始
1 0 : 3 0 ~ 1 0 : 4 5	開会（教育長挨拶・日程説明）
1 0 : 4 5 ~ 1 1 : 4 5	基調報告「井野長割遺跡について」
1 1 : 4 5 ~ 1 2 : 4 5	一昼食一
1 2 : 4 5 ~ 1 3 : 1 5	事例発表①「寺野東遺跡について」
1 3 : 1 5 ~ 1 3 : 4 5	事例発表②「三直貝塚について」
1 3 : 4 5 ~ 1 4 : 0 0	休憩
1 4 : 0 0 ~ 1 4 : 3 0	事例発表③「三輪野山貝塚について」
1 4 : 3 0 ~ 1 5 : 0 0	事例発表④「縄文後晩期の集落構成と盛土遺構」
1 5 : 0 0 ~ 1 5 : 1 0	休憩
1 5 : 1 0 ~ 1 6 : 0 0	討論会
1 6 : 0 0 ~ 1 6 : 3 0	質疑応答
1 6 : 3 0 ~ 1 7 : 3 0	遺跡自由見学

* 井野長割遺跡の現地には駐車場はありません。当地より徒歩10分程の距離ですので自家用車の使用はご遠慮ください。（案内図は最終ページにあります）

* 遺跡内は終日自由見学が出来ますが、コース以外には入らないようにしてください。遺跡保護のため通路整備等はしていません。足元には十分注意してください。

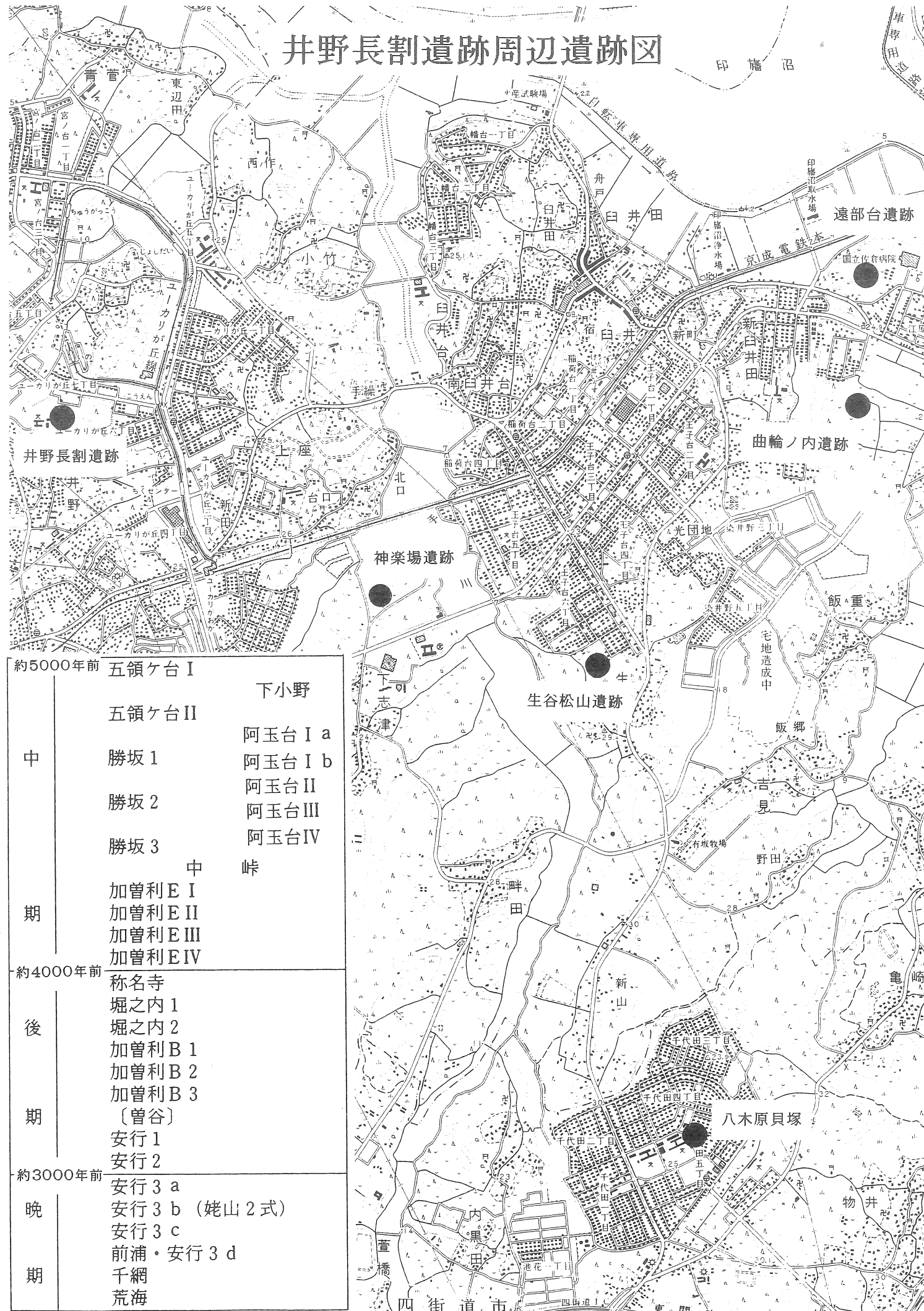
* 本日以外は遺跡地内には入らないで下さい。（民有地・学校用地の為）

— メ モ —

シンポジウム関係周辺遺跡図



井野長割遺跡周辺遺跡図



井野長割遺跡について

佐倉市教育委員会・(財) 印旛郡市文化財センター

小倉和重・田中大介

遺跡の概要

遺跡は、佐倉市の西部、八千代市との市境に位置し、印旛沼の西岸、標高約 26mの台地上に立地している。遺跡の一部は市立井野小学校の敷地であるが、大部分は東側に隣接する山林に展開している。

遺跡の発見は、昭和 44 年の小学校造成工事の際に、多量の縄文土器が出土したことに端を発する。その後、9回にわたる発掘調査等が行われ、本遺跡が縄文時代後期から晩期（今から約 4,000 年～3,000 年前）の拠点集落であることがわかった。しかも、当該期に形成された「環状盛土遺構」と四バレル遺構が現在もお山林の中に良好に視認できる点で、全国的にも稀有な遺跡として認識されるに至った。

この「環状盛土遺構」は、宅地造成や小学校建設によりおよそ半分が失われてしまっているが、南北 160 m、東西 ¹²⁰80mほどの楕円形にめぐっていたと推測される。現存する盛土は4基（M1～M4）であるが、これまでの調査による推定では、本来は少なくとも6基存在していたと考えられる。また、本遺跡では、環状盛土遺構のほか、竪穴住居跡、貯蔵穴、墓穴、道といった各種の遺構が確認されている。

井野長割集落の変遷

居住の痕跡を示す住居跡の存在をもって集落とみなせば、本遺跡の集落形成は後期前葉（堀之内式期）と言える。今のところ、M5下から検出された住居跡のほか当該期の遺構は確認されていないが、土器が一定量出土していることから、少なくともこの時期には集落が形成されたと言える。それより以前、中期の土器片がわずかに認められるものの、遺構の内容は今の

ところ不明である。

そして、後期中葉、加曽利B式期になると、遺構・遺物ともに増加する。M5下の大型住居跡（推定直径10m余り）のほか、M5裾部で土器塚が確認されている。また、M1の東側裾部にも土器塚や住居跡などの遺構の存在が確認されている。およそ、当該期の遺物は、遺跡の全域から出土しており、集落規模が拡充していった様相がうかがえる。

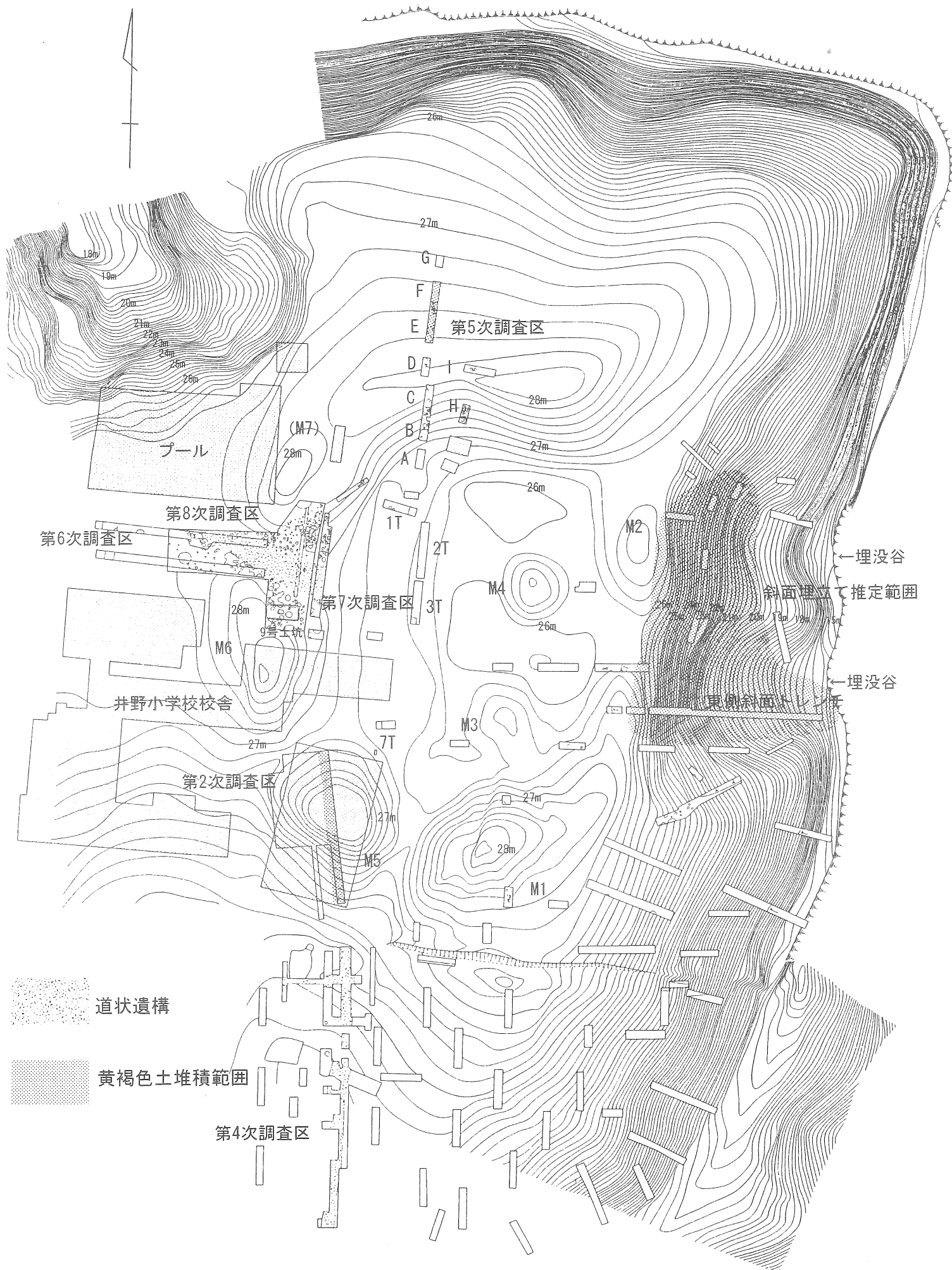
後期末葉、曾谷式～安行2式期にかけては盛土の形成が促進され、集落景観が大きく変貌する。東側斜面部の土坑や推定M7裾部の墓坑からは曾谷式土器が出土しているほか、推定M6下では貯蔵穴の覆土上層で安行2式土器が出土しており、その上に盛土が形成されていることが確認された。集落東側の斜面部では、この頃の遺物が多量に出土しているほか、盛土部分からの出土量も総じて多い傾向が認められる。

晩期前半、安行3a～3d式期は、前段階と比べると遺構・遺物ともに減少傾向にある。遺構は、M2下で検出された安行3a～3b式期の住居跡1軒のほか、同じくM7推定範囲で同時期の住居跡（少なくとも2軒が重複関係にある）が確認されている。晩期後半にいたっては、大洞系の土器がわずかに出土しているものの、遺構は確認されていない。

以上、おおまかに集落の変遷について述べてきた。次項では、今回の主題である「環状盛土遺構」に重点をおきながら、各遺構との関係について概観し、本遺跡の性格について若干意見を述べることにしたい。

環状盛土遺構について

本遺跡の盛土は、大きく2群に分けて見ることがで



第1図 井野長割遺跡全体図 (S=1/1200)

きる。すなわち、環状にめぐる「外盛土」(M1・M2・M5・M6・M7)とそれに対して独立ないし付随して存在する「内盛土」(M3・M4)である。両者を見比べると、「外盛土」は「内盛土」に比べて規模が大きい。なおかつ、M5・M6が独立盛土の様相を呈しているのに対し、M1とM2・M7は南北で対称的な形状(弧状)を呈し、盛土の西側が高く、東側に向かうにつれて低くなるという対称形をなす。また、M5とM6は隣り合う盛土であるが、それぞれ独立した盛土として存在していたようである。その点では、「内盛土」のM3・M4と同様である。このように、「外盛土」と「内盛土」は規模・形状において異なる。また、「外盛土」と「内盛土」はその形成過程においても差があると考えられる。すなわち、「外盛土」が基底部から徐々に盛土が形成されていったのに対し、「内盛土」は周囲の地山が削平されたことにより基底部が周囲より高くなった上に盛土されたと考えられる。このことは、第7次調査区における地山ローム層面の微高地の存在、盛土や斜面部に堆積しているローム層に起因するとみられる大量の黄褐色土の存在から推測される。

盛土の形成時期については、多くの調査区で盛土下から後期の遺構群が確認されていることから後期末葉には開始されたと考えられるが、すべての盛土について調査をおこなった訳ではないので一概には言えない。その形成期間についても決して短期間で形成されたわけではない。第5次調査では、晩期前葉(安行3a～3b式期)の住居跡を覆うかたちで盛土層の堆積が認められたこと、M5・M7の上層部で晩期の遺物が多く出土する傾向にあることから、すべての盛土がそうであったとは言い切れないが、後期末葉から晩期前葉の間に形成されたのではないかと考えられる。

盛土の内部は、土器片を中心とする多種類の遺物が包含されているほか、小規模な貝塚が点在している。貝塚はM7頂部の下層・上層、あるいはM7外側裾部の上層・下層に分布している。遺構については、盛土断面に柱穴状の遺構が認められることから、なんらかの施設が構築されていたことも事実である。また、M

7の中位に硬化した土層が認められたことから、なんらかの遺構の存在や生活面の存在を推測させる。盛土形成層は各々多様であるが、もっとも注目すべき土層として「ローム質黄褐色土」がある。これは、第1次調査時においてすでに盛土を形成する主体的な土層として認識されていたものであるが、最近の調査により各地点で本土層が確認されており、本土層の起源が盛土の形成のみならず、本遺跡の性格を考えていく上できわめて重要な指標となりうることを再認識するに至った。

「ローム質黄褐色土」について

本土層は、東側斜面部の一部に分布しているほか、M7の外側裾部、M5の頂部から外側裾部で確認されている。土層は全体に緻密であることが第1次調査で述べられおり、目立ったロームブロックは認められない。東側斜面部では埋没谷部分でもっとも厚く堆積しており、その厚さは2mにも及ぶと推測される。M5では凸レンズ状に1.3mほど堆積しており、その下から後期中葉、加曽利B式期の住居跡が検出されている。本土層の堆積時期は、おおよそ後期後半から晩期前葉(曾谷式～安行3b式期)に堆積したと推測される。とくに、東側斜面の埋没谷部分では、本土層だけで6枚に分層することができ、数回の単位で堆積したことがわかる。

本土層の起源は、第7次調査の結果、「中央窪地」と呼ばれる集落の中心部分の地面を掘り上げた土であると考えられる。中央窪地の土層堆積は盛土部分とくらべると単純で、地山のローム層まで表土、黒色土、暗褐色土を基調とする土層の3層に大別される。遺物は、黒色土と暗褐色土の境より下位から少量出土しているが、その多くが晩期前半の土器である。おそらくは、集落が衰退する晩期前半まで、中央窪地に人の手が加わっていたと考えられる。

環状盛土に現された縄文人の世界観

本遺跡は、中央窪地と環状盛土を伴う集落として特徴づけられるが、集落の形成当初から盛土が存在し

た訳ではない。中央窪地については、集落の終焉間際まで手が加えられていたであろうから当初の地形は不明であるが、後期の段階においては、集落を構成する住居や土坑などは中央窪地を取り巻くように広く分布している。その一部は盛土の外側にも及ぶ。このことは、遅くとも、後期後葉にいたって盛土が形成されるに従い、中央窪地をより意識したムラの空間設計がなされたことを現している。そして、それ以降、その設計に基づき、東側斜面に入り込む谷を累々と埋め立てるまでして環状に盛土をめぐることに労力を費やしたのである。そうかといって、盛土をめぐることだけが目的ではなく、多くの遺構の存在が裏付けるように、その上で日常生活を営んでいたわけである。それに比べ、中央窪地にはほとんど遺構が認められないことから、盛土とは異なる空間として意識されていたようである。それが、如何なる理由によるものなのかは未だ不明であるが、盛土と中央窪地は画然と区別されていたのである。そして、盛土が形成され始めると居住域は盛土より外には展開しない傾向が見受けられる。集落形成当初、すなわち後期前半に意識されていた中央窪地は、盛土の形成開始以降、すなわち後期後葉（曾谷式～安行2式）以降、中央窪地に加え盛土とその外側をも区別するように意識が変化していったのではなかろうか。

盛土の内側と外側が区別化される一方で、盛土の内と外を結ぶ痕跡が2カ所で確認されている。それは、M6とM7の間の遺構空白地帯と、おおよそM1とM5の間に位置する溝である。前者は、おそらく溝の痕跡と考えられる。北側に後期～晩期の住居跡や掘立柱建物跡、墓坑などの遺構が分布するのに対し、南側には後期後半の貯蔵穴群が主体的に分布するという明確な構築施設の違いが認められる。南側の溝は、集落の南側に入り込む谷頭に繋がる道と考えられており、下層で硬化面が検出されている。形成時期は後期前葉（堀之内式期）と考えられる。溝の西脇には、後期末葉（曾谷式期）の埋設土器を伴う土坑1基のほか、長楕円形の掘り込みを呈する土坑2基（時期不明）が検出されている。これらは墓穴と考えられる。遺構空

白域も溝も重複する遺構が皆無であることから、おそらくは、集落の形成当初から長い間道として機能していたのではなかろうか。南側の溝は不確かであるが、盛土の間を縫うように道が走っていたとすれば、盛土がこの道に規制されるようなかたちでレイアウトされたのであろう。2本の道の脇に、墓穴が存在する点も興味深い。

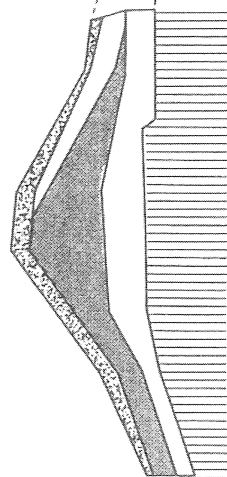
環状盛土は、中央窪地を基に後期から晩期にかけてより立体的な方向へとその景観を大きく転換させた末の構造体であり、縄文人の意識（世界観）が具現化したものと理解したい。

〈井野長割遺跡関連主要文献〉

- 近森正 1969 「長割遺跡調査略報」『文化財時報』佐倉市教育委員会
清水潤三ほか 1971 「佐倉市志津長割遺跡調査概報」『佐倉地方文化財』4 佐倉市文化財保護協会
清水潤三・鈴木公雄 1974 『井野長割遺跡概報』佐倉市教育委員会、慶応大学民族学・考古学研究室
内田儀久 1977 「千葉県佐倉市井野長割遺跡出土の異形台付土器」『考古学雑誌』第63巻第3号 日本考古学会
田川良 2000 「井野長割遺跡」『千葉県の歴史（通史編 旧石器・縄文時代）』（財）千葉県史料財団
小倉和重 2001 「井野長割遺跡―縄文時代のスペースデザイン、『円環の秩序―』」『第5回遺跡発表会発表要旨』（財）印旛郡市文化財センター
小倉和重 2002 「井野長割遺跡（第5次）―盛土に表された縄文人の世界観―」『第6回遺跡発表会発表要旨』（財）印旛郡市文化財センター
小倉和重 2003 「盛土を有するムラ―井野長割遺跡―」『縄文社会を探る』（株）学生社
田中大介 2003 「井野長割遺跡（第7次）―窪地に花開いた縄文のムラ―」『第7回遺跡発表会発表要旨』（財）印旛郡市文化財センター
戸谷敦司 2004 『井野長割遺跡（第4次）』（財）印旛郡市文化財センター
小倉和重 2004 『井野長割遺跡（第5次）』佐倉市教育委員会
田中大介 2004 『井野長割遺跡（第6・7次）』（財）印旛郡市文化財センター
田中大介・小倉和重 2004 『井野長割遺跡（第8次）』（財）印旛郡市文化財センター
（財）印旛郡市文化財センター 2001 『フィールドブック』vol.9
（財）印旛郡市文化財センター 2003 『フィールドブック』vol.16

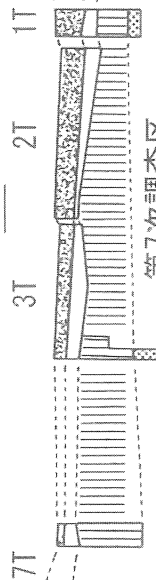
南

28m
27m
26m
25m



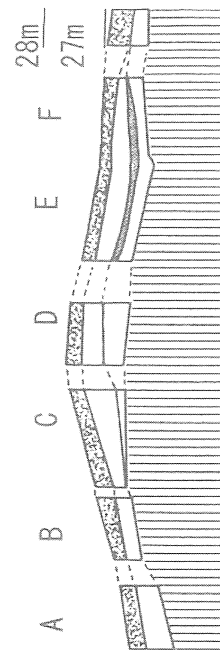
第2次調査区

28m
27m

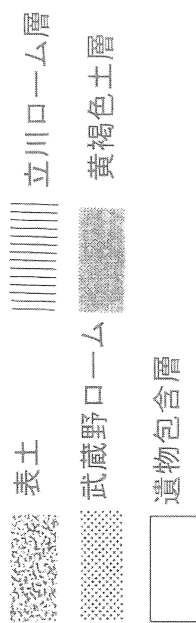


第7次調査区

北



第5次調査区



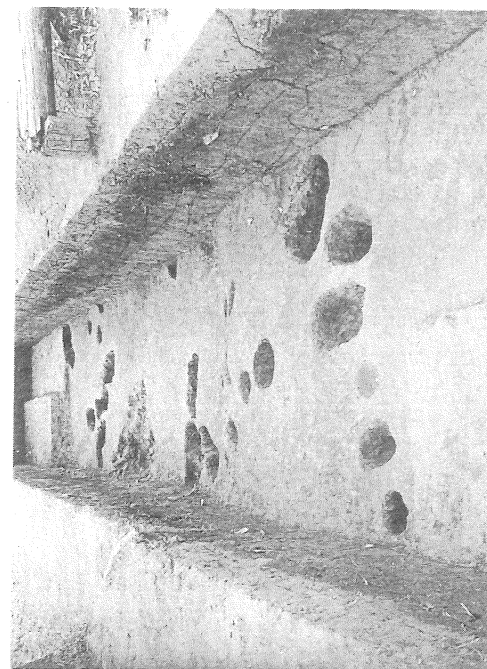
第2図 第2・5・7次調査区土層断面模式図 (横軸：S=1/600 縦軸：S=1/120)



第8次調査区9号土坑遺物出土状況



第7次調査区1T深掘り部分土層断面



第5次調査区E・Fトレンチ1号住居跡全景

寺野東遺跡について

(財) とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

江原 英

1. 寺野東遺跡調査の概要

<位置>

栃木県南部小山市の南東に位置し、鬼怒川支流の田川右岸に延びる台地の東端に所在する。遺跡東側は田川・鬼怒川低地に面する崖となっており、崖下には近世に掘削された用水が南流する。標高は約43mで、遺跡東側の水田面との比高差は約5mである。

<遺跡の概要>

寺野東遺跡は旧石器時代から平安時代までの複合遺跡である。発掘調査は小山東部地区工業用地造成に伴うもので、平成2年度から平成6年度まで、(財) 栃木県文化振興事業団（現とちぎ生涯学習文化財団）埋蔵文化財センターと小山市教育委員会によって行われた。調査区内には浅い谷があり、遺構の多くがこの谷を挟んだ東西の台地平坦面から谷へかかる斜面にかけて検出されている。縄文時代の遺構では中期前半から晩期にかけての住居跡・土坑が多く確認されている。この中期から晩期に至る各時期により、主要活動域の場所・遺構の占地に差異を見出せる。また、谷部内には水を利用する施設である縄文時代後期初頭から晩期にかけての水場の遺構・木組遺構が検出されており、谷を広く利用していたことが窺える。

<縄文時代集落の概要>

中期前半の阿玉台式期では9軒の住居跡があり、谷西南半が集落の中心域である。中期後半加曽利E式期では65軒の住居跡があり、谷東が集落の中心域となる。数多く確認された中期の土坑の多くは貯蔵穴と推定される。谷東の中期集落域は、後述の環状盛土遺構と一部重なる。

後期初頭称名寺式期では22軒の住居跡があり、谷東を中心とするが、谷西にも住居跡の設営が開始され

る。住居跡は斜面に占地するものが多いが、貯蔵穴は台地平坦面にも多い。谷部に水場の遺構が作られる。

後期前半の堀之内式期は寺野東縄文集落の変化を捉える上で画期となる時期である。住居跡18軒は谷西を中心とし、谷東では環状盛土遺構の形成が始まる。貯蔵穴や墓は少数の確認に留まるが、包含層の様相を考慮すると、遺跡内の広い範囲に居住・活動の痕跡が確認される時期とすることができる。

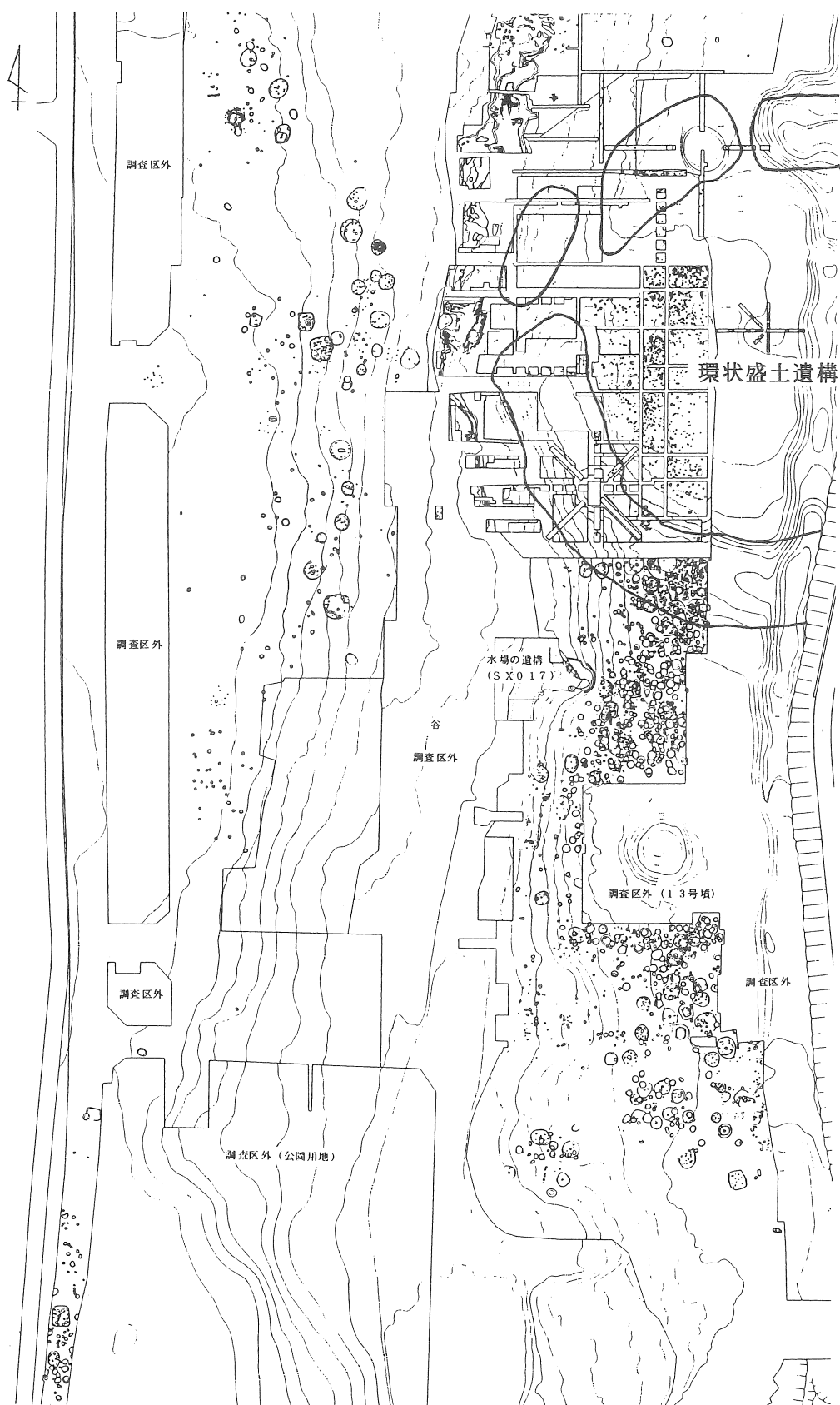
後期中葉の加曽利B式期は住居跡の確認数が少なく、盛土内の1軒を加えても3軒の確認に留まる。環状盛土遺構範囲外では土坑の数や包含層内の土器出土量も少なく、環状盛土遺構が集落の中心域となる。

後期後半、曾谷式～安行1式期の住居跡数は盛土内の2軒を含め計8軒で、環状盛土遺構内と谷西に占地している。土坑の数は極めて限られるが、この傾向は晩期まで続いている。

晩期前半は、引き続き環状盛土遺構内が集落の中心域と推定されるが、住居跡の確認は為されていない。続く晩期中葉は環状盛土遺構内側削平部が集落の中心で、多数のピットとして確認されているものの多くがこの時期の建物跡と推定している。谷部遺構群の構築は後期後半から次第に活発になるようで、特にこの晩期中葉に至り大形の木組遺構がつくられる等、谷部の利用が最も顕著となる。

2. 環状盛土遺構の概要

環状盛土遺構は、調査区のほぼ中央を南北に走る谷の東側、台地平坦面から谷へかかる斜面にかけて、外径約165m、幅約15～30mの盛土が半周する遺構である。東側は川の浸食と近世の用水掘削によって台地がカットされており、縄文期環状盛土遺構の高まりもそ



第1図 寺野東遺跡縄文時代遺構配置図 (S=1/2,000)

の際に削られているようである。

環状内側の窪みと半円形に巡る土塁状の高まりは、現地形上でも確認できる。当初これは自然地形とも考えたが、盛土部分南端の面的調査とトレンチ調査の結果から、縄紋後・晩期に形成されたものと判断した。盛土は平面的に4つのブロックに分けることができる。各々の盛土ブロックの間は谷状に低くなり、古墳時代の火山灰を含む黒色土が堆積している。出土遺物から見た各盛土ブロックの形成時期は、重なりがあると同時に、ブロックによって主体となる盛土形成の時期に若干の違いも考えられる。

環状に巡る盛土範囲の内側は、盛土行為を行う際の削平部分である。ここでの削平された面であるローム地山面は、鹿沼軽石層より下位の面であることが確認されている。この部分には、地山面直上で晩期包含層、この上位で黒色土の堆積がある。盛土に近い弧状の範囲のローム面には多数の小穴が確認され、掘立柱建物跡及び住居跡の存在を推定している。これらの小穴や包含層からは晩期初頭から大洞C2式までの遺物が主に出土しており、必ずしも明確ではないものの、晩期における居住域については、この盛土内側の削平部を考えることができよう。一方、内側削平部の中央やや北よりの場所に、削り残されて高まりとなっている不整楕円状の台状遺構がある。台状部分には地山鹿沼軽石層より少し上の層上面で、5～10 cmの礫を使用した石敷きがある。

環状に配される盛土は、かなり複雑な堆積を示している。地点により異なるが、概ね堆積土下部は骨・炭化物の多い茶褐色土または黒色土から構成されている。これより上位にあるローム質の褐色土は、より削られたままに近いプライマリーな性質を示す。この中には、鹿沼軽石を多く含む層も認められ、人為的な盛土であることは明らかである。とりわけ谷斜面にかかる地点で、このローム質褐色土が谷の奥へ向かって順次堆積している様子を顕著に見ることができる。台地平坦面における盛土は、ローム質の褐色土と炭化物の多い黒色土が交互に堆積するパターンを基本とする。また、これらの層間に1～2mの面的広がりをもつ焼土層の

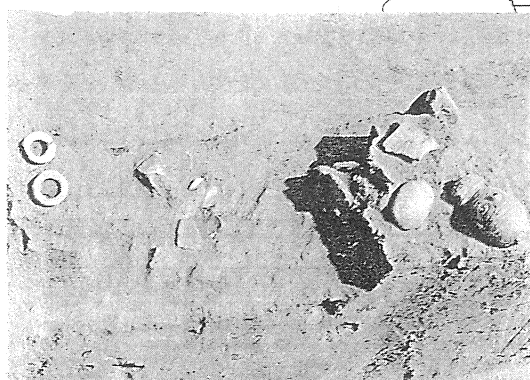
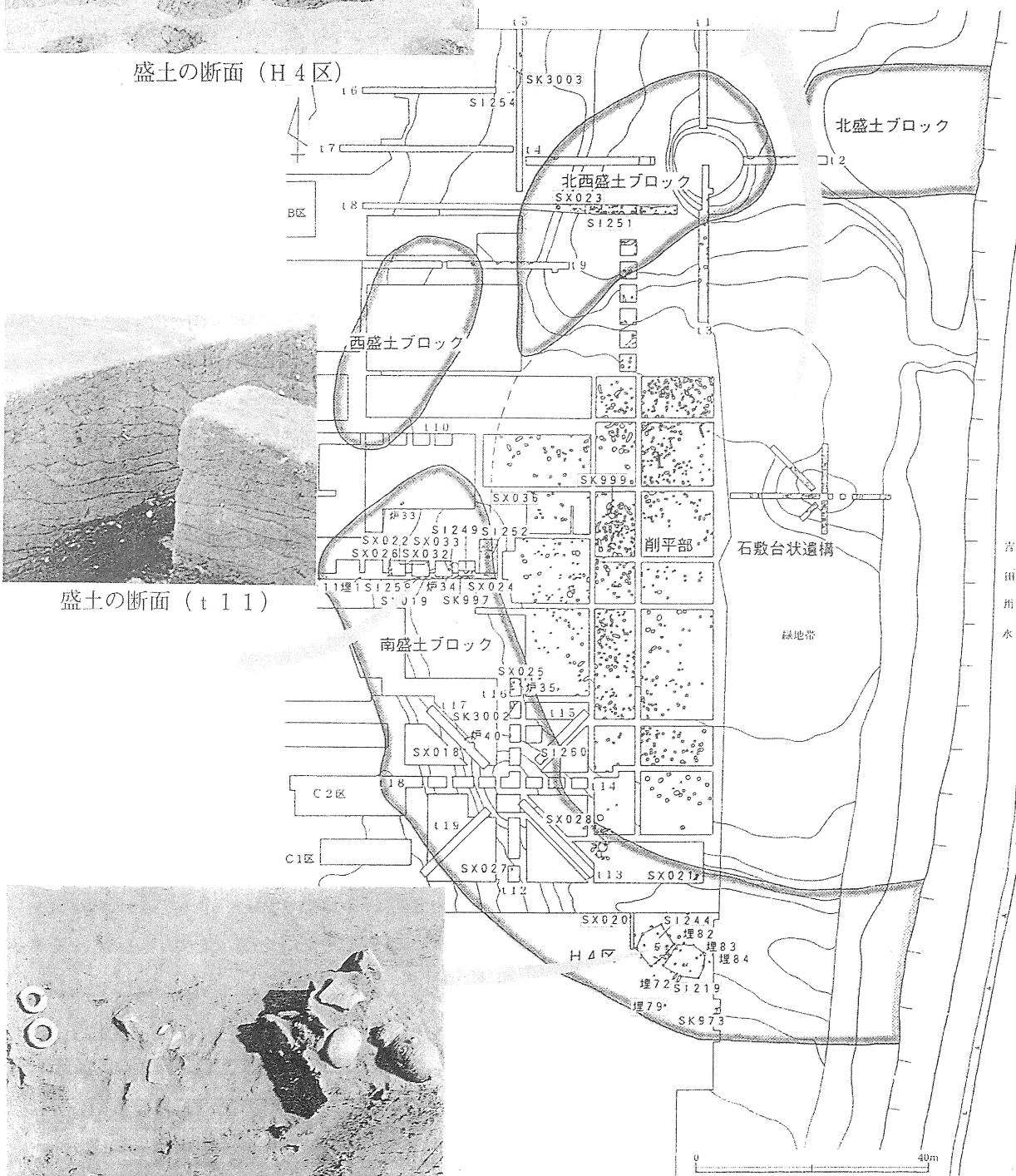
入る場合がある。これら堆積層の複合によって横断面「塚状」の高まりが形成される。骨片・骨粉（イノシシ・ニホンジカ）は殆どの層中で認めることができるが、とりわけ黒色土及び焼土層中に多い。層中の遺構や出土遺物から、概ね後期前半堀之内1式期から盛土の形成が始まり、晩期前半の安行3b式期まで続いたものと考えられる。但し細別された盛土各層中ではかなり広い時期幅の遺物が混在して出土しており、厳密な各層の時期を判断することは困難である。確実ではないが、北西盛土ブロックでは加曽利B式期からの形成が推定され、盛土の形成過程も地点によりかなり差異があることも推定できる。

盛土範囲内からは、住居跡、埋甕、柱穴等を検出している。住居跡の多くは堀之内式期で、盛土直下または堆積土下部で確認されたものが多い。加曽利B式以降の住居跡は極めて少ない。

盛土中よりの土器・石器、礫の出土量は極めて多い。土器は大形破片が集中して出土するような部分もあるが、基本的には細片で接合関係もさほど認められていない。明瞭な層位的出土状況を示さず、量的には粗製土器が圧倒的多数を占めている。石器は磨石・石皿や打製石斧の他、礫石錘の出土量が多い。盛土中から出土した土偶や耳飾等の「特殊遺物」も多量である。環状内側の削平部よりは、石剣、独鈷石、土版等の晩期に特徴的な遺物の出土が顕著である。

3. 環状盛土遺構研究の課題

寺野東遺跡で検出された縄紋時代の環状盛土遺構は、関東地方において初めて明確に確認・記録された遺構である。環状盛土遺構内部での住居跡等の少なさや特殊遺物の多量出土から、当初は祭祀的な要素に注目した評価が主であったが（堀越 1995 等）、その後集落跡としての評価も現れた（阿部 1996）。報告書では、粗製土器や石器をはじめとする普遍的な遺物が多量に出土していることに注目し、盛土部分が当時の居住域である可能性を示した（江原 1997）。また、後・晩期の集落に関わる研究史の検討と環状盛土遺構の類例集成により、寺野東遺跡の環状盛土遺構が、窪地を囲ん



で環状の高まりが巡るという形態や時期のみならず、層の特徴や堆積状況・遺物出土状況等で、環状（馬蹄形）貝塚を含めた類例と共通点が多く認められることを指摘した（江原 1999a・b）。またこれら類例との比較作業等によって、環状盛土遺構は決して祭祀的・非日常的な構築物ではなく、関東地方後・晩期において一定程度普遍的な集落の一形態として議論すべきとの意見を提出した。

以上のような状況を踏まえつつ、今回のシンポジウムに関わる幾つかの着目点及び課題の中から、とりわけ盛土層の特徴とその由来及び時期について、寺野東遺跡の調査成果の中から整理しておきたい。

寺野東遺跡の環状盛土遺構は、未調査部分が多く、不明な点が多い。しかしながら、平面形態、層堆積状況及び層自体の特徴等において、盛土ブロック間で、或いは盛土ブロック内においても地点によってかなり差異が認められる点は確認しておく必要がある。とりわけ台地平坦面における盛土堆積状況と斜面における堆積状況では、角度・黒色土の有無・遺構数・遺物量等において大きく異なることから、盛土自体の性質・評価も慎重に検討すべきであろう。台地平坦面H4区における盛土中に「面」を推定できることは、盛土形成過程や集落形成を考える上で注目される。また、盛土遺構範囲内の褐色土についても、削平したローム土をそのまま盛り上げたようなローム質土は必ずしも多くはなく、一定程度変質・変容したものが多い。これらのことと関わって、実際の土層観察において、「包含層」との区別が困難な盛土層も見られたことを改めて指摘しておきたい。更に、t16で確認された堀之内2式期の住居跡（炉35）では、「住居廃絶直後に自然堆積の覆土が形成されず、人為的な盛土がなされた」と考えた。他の地点においても「炉直上の土層が必ずしも推定される住居範囲に限定できないこと、通常の覆土とは異なる様相」に注意し、「盛土自体の成因を考える上で看過できない事象」とした（江原 1997）。

以上のように多次にわたる土の移動等、検討すべき課題を多く残すが、盛土層の由来について、基本的には中央窪地におけるロームを考える。この考えはすべ

ての環状盛土遺構における中央窪地や盛土の形成要因を一元的に捉えるものではないが、「類例」遺跡において中央窪地のローム面層準から推定される削平と盛土行為との対応関係が認められる例が増えている点に注目したい。但し、削平と盛土形成により、旧地形が大きく変更されている状態を認識しておく必要がある。

盛土の形成時期については、後期前半堀之内1式期から、晩期前半安行3b式期までと捉えているが、これについても問題が多い。とりわけ、北西盛土ブロックの形成は南盛土ブロックと異なり、加曽利B2式以降と判断できる点も、大形の住居跡の存在と併せ、確認しておくべき事項である。盛土が削平したローム土を用いていること、各層中の土器型式が混在していることから、遺物の原位置からの移動が著しいことが推定でき、このことが各層の時期判断を困難とする主要因となっている。また、未調査部分が多いとは言え、出土土器の中で比較的数量の少ない細別型式もある点も再度指摘しておく。

いずれにしても、盛土堆積状態や遺物出土状態等についての各遺跡の相互比較という基礎的な検討は、環状盛土遺構形成要因の解明に向けての第一に必要な作業で今日的な課題である。

文献

- 阿部芳郎 1996「縄文時代のムラと「盛土遺構」」『歴史手帖』24・8
江原英ほか 1997『寺野東遺跡Ⅴ（縄文時代 環状盛土遺構・水場の遺構編）』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
江原英 1999a「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例」『研究紀要』7（財）栃木県文化振興事業団
江原英 1999b「遺構研究 環状盛土遺構」『縄文時代』10
江原英 2001a『寺野東遺跡Ⅲ（縄文時代 住居跡編）』栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
江原英 2001b「環状貝塚・環状盛土遺構」『縄文時代集落研究の現段階』発表要旨
堀越正行 1995「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚書」『史館』26